



令和7年度 富山市立水橋西部小学校

天瀬っ子

学校だより 12月号



「イマージョン的教育」から学んだこと

イマージョン的教育担当・6年担任 海村 由紀

「イマージョン的教育」これは、本校が来年度新しいスタートを切る水橋学園に向けて取り組んでいる学習の一つです。イマージョンとは英語の *immerse* (浸す) が語源となっています。「その言語に浸りきって習得する」という意味で、簡単に言えば「外国語を」ではなく「外国語で他教科も」勉強しながら言葉を学んでいくプログラムです。

本校では、2学期より毎週木曜日の昼休みの時間に「All English Time」と名付けた全校児童・教員が一緒に英語に浸る時間を設けています。そこでルールはただ一つ「英語でコミュニケーションをとる」ことです。初めての取組の中、活動の企画・運営の重責を6年生の子供たちが担います。そんな6年生の子供たちに「All English Time」の活動の趣旨を投げかけると、子供たちからは「できるわけがない」「何をしたらいいの」「英語で話すなんて無理」と、否定的な言葉が飛び交いました。初めてのことに臆する子供たちの気持ちを受け止めつつ、私が「やってみる前から決めてはいけないよ。やってみたら、新しい何かが見えるかもしれない。先生も一緒に頑張るよ。とにかくやってみよう」と語りかけたとき、子供たちは不安を抱きながらも新たな取組に向き合おうと動き始めたのです。

手探りの中、1回目の活動では「日本語を話さなければいい」と考え、相手と話さなくとも成立するゲームを多く取り入れました。しかし、「これでは活動の意味がない」と気付いた子供たちは、2回目以降、各自で活動内容を工夫し始めます。子供たちなりに「All English Time」の活動を具体化していくのです。片や「先生、みんな全然英語で話してくれん」と、新たな悩みも生まれ始めます。そこで、「『話してもらう』のではなく、『必然的に話す場をつくる』ようにしてはどうかな」と、アドバイスしました。それから子供たちの様子は更に変化していき、「ここで『Repeat』を入れると、みんなも発音するね」「先生、今日うまくいったよ。みんながたくさん英語を話していたよ！」等、意欲的な声が聞かれようになりました。同時に、子供たちが次第に「イマージョン的教育」の意味や働きを意識した活動へと変化していることに驚きと嬉しさが入り混じり、私は感慨深い気持ちになりました。

今では、外国語科の学習で行ったゲームを振り返り「これ、『All English Time』でも使えるね」とつぶやいたり、「今週の『All English Time』の準備をしていないよ。考えないと！」と前向きに話したりするなど、子供たちにとって「イマージョン的教育」が日常となっています。このような姿を見て、最も英語に浸っているのは活動を中心となって取り組んでいる6年生の子供たちだと感じるとともに、一人一人の確かな成長を感じています。

この「All English Time」の取組を通して、子供たちの姿から、先の見えないものや新しいことに挑戦することの大切さを改めて実感しました。来年度は、富山市初の義務教育学校である水橋学園が開校し、子供たち一人一人が新たな環境へと進学します。きっと新しいことで溢れる毎日になるでしょう。しかし、子供たちに忘れてほしくないのは、先の見えないものや新しいことに挑戦し続ける心です。こうした経験が糧となり、子供たちの可能性が一層ひらかれるることを願っています。



【「All English Time」に取り組む子供】